大門正克 特任教授　略歴・業績

略　歴

1953年　千葉県生まれ
1977年　一橋大学経済学部卒業
1979年　一橋大学経済学研究科修士課程修了
1982年　一橋大学経済学研究科博士課程退学
1983年　市立大月短期大学経済科専任講師
1993年　都留文科大学文学部比較文化学科助教授
1996年　博士（経済学）一橋大学
2001年　横浜国立大学経済学部教授
2015年　横浜国立大学理事・副学長
2019年　早稲田大学教育・総合科学学術院特任教授

主要業績

＜著書＞

単　著『明治・大正の農村』（岩波ブックレット，1992年）
『近代日本と農村社会――農民世界の変容と国家』（日本経済評論社，1994年）
『民衆の教育経験――農村と都市の子ども』（青木書店，2000年）
『歴史への問い／現在への問い』（校倉書房，2008年）
『全集日本の歴史 15　戦争と戦後を生きる』（小学館，2009年）
『Jr. 日本の歴史 7　国際社会と日本』（小学館，2011年）
『語る歴史，聞く歴史――オーラル・ヒストリーの現場から』（岩波新書，2017年）
『増補版　民衆の教育経験――戦前・戦中の子どもたち』（岩波現代文庫，2019年）
『日常世界に足場をおく歴史学――新自由主義時代のなかで』（本の泉社，2019年）
『世界の片隅で日本国憲法をたぐりよせる』（岩波ブックレット，2023年）
編　著『昭和史論争を問う――歴史を叙述することの可能性』（日本経済評論社，2006年）
『新生活運動と戦後の日本――敗戦から 1970年代』（日本経済評論社，2012年）
共編著『地域における戦時と戦後』（日本経済評論社，1996年）
『近現代日本社会の歴史――近代社会を生きる』（吉川弘文館，2003年）
『近現代日本社会の歴史――戦後経験を生きる』（吉川弘文館，2003年）
『「生存」の東北史――歴史から問う 3・11』（大月書店，2013年）

『「生存」の歴史と復興の現在―― 3・11　分断をつなぎ直す』（大月書店，2019年）

『「生きること」の問いかた――歴史の現場から』（日本経済評論社，2022年）

『「生存」の歴史をつなぐ――震災10年，「記憶のまち」と「新たなまち」の交差から』（績文堂出版，2023年）

共　著『近代農民運動と支配体制』（柏書房，1985年）

『戦間期の日本農村』（世界思想社，1988年）

『近代日本の行政村――長野県埴科郡五加村の研究』（日本経済評論社，1991年）

＜論文＞

「産業組合の拡充と農村構造の再編――長野県南安曇郡温村の事例を中心に」（『土地制度史学』第91号，1981年，pp. 1 ～20）

「農民的小商品生産の組織化と農村支配構造―― 1920年代近畿型地域の小作争議状況との関連で」（『日本史研究』第248号，1983年，pp. 1 ～37）

「第1次大戦後の農村振興問題と諸勢力」（『一橋論叢』第89巻第5号，1983年，pp. 684～706）

「初期小作争議の論理構造」（（上）『歴史評論』第435号，1986年，pp. 11～18，（下）『歴史評論』第436号，1986年，pp. 106～117）

「小作争議のなかの娘たち」（『歴史評論』第467号，1989年，pp. 45～63）

「近代日本における農村社会の変動と学校教育」（『ヒストリア』第133号，1991年，pp. 175～198）

「学校教育と社会移動――都会熱と青少年」（『日本の近代と資本主義』東京大学出版会，1992年，pp. 157～187）

「日本の近代化と農村青年の世界」（『信濃』第45巻第4号，1993年，pp. 1 ～26）

「名望家秩序の変貌――転形期の農村社会」（『シリーズ日本近現代史』3，岩波書店，1993年，pp. 65～108）

「農村から都市へ――青少年の移動と『苦学』『独学』」（『近代日本の軌跡 都市と民衆』吉川弘文館，1993年，pp. 174～195）

「農民の生活の変化」（『講座世界史』第4巻，東京大学出版会，1995年，pp. 67～92）

「農民自治とデモクラシー」（『デモクラシーの崩壊と再生』日本経済評論社，1998年，pp. 145～180）

「歴史と現在への問い――九九〇年代の歴史研究と歴史意識をめぐって」（東京学芸大学史学会『史海』第46号，1999年，pp. 11-17）

「農村社会と都市社会」（『日本経済史』2，東京大学出版会，2000年，pp. 317～360）

「1950年代の農民家族」（中村政則編『近現代日本の新視点』吉川弘文館，2000年，pp. 57～79）

「日本近代史研究における1990年代」（『歴史評論』第618号，2001年，pp. 46-60）

「時代を区分するということ」『現代歴史学の成果と課題』Ⅰ，青木書店，2002年，pp. 140～158）

「教育と移動――近代日本の農村社会から」（『社会経済史学の課題と展望』有斐閣，2002年，

pp. 453～468）
「新興工業都市の形成――経済過程と労働力の構成を中心に」（『近代日本都市史研究』日本経済評論社，2003年，pp. 438-482）
「生活を改善するということ――戦後山梨の農村女性たち」（『山梨県史研究』第 11 号，2003年，pp. 79-104）
「聞こえてきた声，そして『聞きえなかった声』」（『歴史評論』第 648 号，2004年，pp. 18～30）
「生者と死者の歴史学――日本近現代の農村を事例に」『宮城歴史科学研究』第 56 号，2004年，pp. 1 ～27）
「農村における主体形成――戦前から戦後へ」（『21 世紀の農業・農村』4，筑波書房，2004年，pp. 13～53）
「農村問題と社会認識」（『日本史講座』8，東京大学出版会，2005年，pp. 301～334）
「1930年代における農村女性の労働と出産」（『エコノミア』第 56 巻第 1 号，2005年，pp. 89～115）
「もう一人の農村女性研究者，山岸正子――戦後の東北を拠点にして」（『女性史学』第 15 号，2005年，pp. 15～36）
「農業労働の変化と農村女性」（『20 世紀日本の農村と農民』東京大学出版会，2006年，pp. 31～56）
「子どもたちの戦争，子どもたちの戦後」（『岩波講座アジア太平洋戦争』6，岩波書店，2006年，pp. 93～122）
「戦前日本における系統産業組合金融の歴史的役割」（『エコノミア』第 57 巻第 1 号，2006年，pp. 27～73）
「戦後日本の農村と開発」（『「開発」の変容と地域文化』青弓社，2006年，pp. 94～119）
「地域・家族の生活リズムと教育の普及――日本近現代の側から」（『年報村落社会研究』4，農文協，2006年，pp. 47～64）
「オーラル・ヒストリーの実践と同時代史研究への挑戦」（『大原社会問題研究所雑誌』第 589 号，2007年，pp. 1 ～16）
「「教育という営み」の戦後史――教育基本法改正問題から考える」『人民の歴史学』第 174 号，2007年，pp. 1 ～12）
「序説 「生存」の歴史学――「1930～60年代の日本」と現在との往還を通じて」（『歴史学研究』第 846 号，2008年，pp. 2 ～11）
「高度成長の時代」（『高度成長の時代』1，大月書店，2010年，pp. 1 ～58）
「「生存」を問い直す歴史学の構想――「1960～70年代の日本」との往還を通じて」」（『歴史学研究』第 886 号，2011年，pp. 29～41）
「昭和史論争後の遠山茂樹――論争の課題をどのように受け継ごうとしたのか」（『歴史学研究』第 895 号，2012年，pp. 14～21）
「歴史実践としての朝日カルチャーセンター講座」（『同時代史研究』第 5 号，2012年，pp. 18～27）

「「生活」「いのち」「生存」をめぐる運動」（『シリーズ戦後日本社会の歴史』3，岩波書店，2012年，pp. 168～196）
「人に話を聞くということは，どういうことなのだろうか」（『現代民俗学研究』第 4 号，2012年，pp. 1 ～ 8）
「高度経済成長と日本社会の変容」（『岩波講座日本歴史』19，岩波書店，2015年，pp. 149～186）
「人びとの「生存」を支える資料と歴史」」（『地域と人びとを支える資料』勉誠出版，2016年，pp. 17～33）
「新自由主義時代の歴史学」（『歴史を学ぶ人々のために』岩波書店，2017年，pp. 39～54）
「序論　歴史学の現在」（『第 4 次　現代歴史学の成果と課題』1，績文堂出版，2017年，pp. 1 ～16）
「「中村政則の歴史学」の歴史的位置」（『中村政則の歴史学』日本経済評論社，2018年，pp. 3 ～40）
「「3・11 からの歴史学」の現在」（歴史学研究会編『歴史を未来につなぐ』東京大学出版会，2019年，pp. 1 ～21）
「自治体史の場合――小平市史の経験を中心に」（『近世・近現代　文書の保存・管理の歴史』勉誠出版，2019年，pp. 245～263）
「高度成長期の「労働力の再生産と家族の関係」をいかに分析するか――大企業社内報を主な史料にして」（『歴史と経済』第 247 号，2020年，pp. 18～28）
「聞く歴史のなかで川田文子『赤瓦の家』を受けとめる」（『性暴力被害を聴く』岩波書店，2020年，pp. 143～165）
「「越境」と「経験」を反芻し，同時代史研究を更新する試み――杉原達の経験と思想に即して」（『同時代史研究』第 13 号，2020年，pp. 91～104）
「覚書　女性の労働・生活とジェンダーを日本近現代史研究で受けとめるために」（『日本史研究』第 700 号，2020年，pp. 126～146）
「戦争体験を「語る」「聞く」という営みについて考える」（『月刊社会教育』第 783 号，2021年，pp. 4 ～11 頁）
「災害をめぐる民衆心理」（歴史学研究会編『「歴史総合」をつむぐ』東京大学出版会，2022年，pp. 165～171）
「一九八〇・九〇年代の＜歴史学研究会と私＞をめぐる試行錯誤」（歴史学研究会編『「人文知の危機」と歴史学』績文堂出版，2022年，pp. 146～155）
「日本国憲法の理解を更新する回路を探る」（『神奈川大学評論』第 103 号，2023年，pp. 100～107）
「オーラル・ヒストリーから考える歴史と歴史学――声と文字史料のあいだ」（『人民の歴史学』第 235 号，2023年，pp. 1 ～10）